

もくぞうやくしによらいざぞう
木造薬師如来坐像

<概要>

員 数	1 軀
法 量	像高 87.7cm
時 代	平安時代（10 世紀末）

自性院^{じしやういん}は愛知県海部郡大治町にある真言宗智山派^{ちさん}の寺院で、北野山自性院^{きたのさんじしやういん}と号する。薬師如来坐像^{やくしによらいざぞう}は自性院の秘仏本尊として、本堂の厨子内^{ずし}に安置されている。本像は、一木造りの等身坐像で、左手掌^{やっこ}に薬壺^{じやうはく}をのせる、通例の薬師如来像である。

頭体幹部は左体側部・右上上膊^(※1)部・右腰脇部を含み、一材から彫出する。体部背面から内割り^(※2)を入れ、蓋板を当てる。両脚部は、丸く突出した腹部を受けるため凹形にうがった横一材を寄せ、その底を内切る。裙先^(※3)は別材である。白毫^(※4)や左右の手指先の一部、裙先、薬壺、漆箔は後補だが、頭体幹部・両脚部のほとんどが当初部分である。

頭部の形状は特徴的で、肉髻^(※5)と地髪^(※6)部の境目が明瞭ではない。こうした頭部の形状は 10 世紀半ばから 11 世紀にかけて造立された如来像の頭部と共通する。また、三日月形の細い眼、単純な丸顔なども、10 世紀の像にしばしばみられる表現である。構造上の特徴としては、腹部が根幹材から丸く突出し、その曲線に合わせて両脚部を寄せる点があげられるが、この独特の木寄せ法も同時代の像と類似している。

室町時代中期の成立とされる『自性院縁起』（仮題、奥書は慶安 5（1652）年）によると、当寺は永祚元（989）年に風害で全壊し、正暦 3（992）年に再興されたという。本像は、まさにその頃の作風・構造を示しており、本像の製作年代は、当寺が再興された正暦 3 年頃とみられる。像に付属する光背^{こうはい}は現在後補の漆箔に覆われているが、像と同時期のものと推測される。

以上、本像は作風・構造の上からも、資料の上からも、10 世紀末（992 年頃）の像と考えられる。像自体の保存状態も良く、像と同時期の光背が残る点も貴重である。愛知県の平安時代彫刻史を語るうえで欠かすことのできない一例となるばかりでなく、10 世紀末の一木造り等身の薬師如来像として、日本彫刻史の分野でも重要な位置を占める像となると考えられる。

(※1) 上膊 腕の、肘から上の部分

(※2) 内割り 像内を割って空洞とする。用材の干割れを防ぎ、重量を軽減している。

(※3) 裙先 仏像の着衣の裾先

(※4) 白毫 眉間のやや上にある白い巻き毛

(※5) 肉髻 仏像の頭頂部にある、盛り上がった部分。

(※6) 地髪 肉髻の下にある髪の部分。



木造薬師如来坐像 正面



右側面



背面



像底



光背